

十地経にみる菩薩の変容過程

—十地経序品の深層心理学的考察—

三輪 幸二郎

1. はじめに

心理療法家として河合隼雄は、欧米から輸入してきた Jung 心理学にもとづいた実践を行っている「私」を考えたとき、仏教に関心を持たざるをえなくなったという。欧米の自我と比べて、日本では全体との関係性のなかに「私」があり、華嚴経に書かれている縁起的世界に生きている存在（河合 1995）として捉えることが、日本で心理療法をおこなう「私」を考えるときに必要であったという。

河合が挙げた華嚴経とは華嚴宗の根本經典である。華嚴宗は中国において始祖を杜順として第2祖の智儼、第3祖の法蔵を経て発展した。日本において華嚴宗は南都六宗のひとつで、本山は巨大な廬舎那仏像を有する東大寺である。華嚴宗で発展した華嚴思想は全ての事物が連関を重ねていくという宇宙観、法界縁起という概念で有名である。全てが連関するという存在論を、河合は治療者としての「私」を考えるときに着目したのである。また日本の華嚴宗の中興の祖である明恵上人は自分の見た夢を記録した「夢記」を残した。河合は深層心理学の観点から夢記を分析し（河合 1987）、明恵を Jung と並べて日本の師と位置付けている。

深層心理学による華嚴経の研究は河合隼雄による考察(河合 1995)が代表として挙げられるが、そこでは井筒の論文(井筒 1989)にもとづいた法界縁起の紹介にとどまっている。華嚴經典の記述には直接は触れていない。河合隼雄のほかにも、いくつか深層心理学による華嚴思想の分析が行われているが、河合隼雄と同様に經典の内容は考察されていない。筆者の調べたところ唯一、内容に触れた研究として挙げられるのは華嚴思想の本質について深層心理学からの考察を述べた山中（山中 2010）の論文だが、そこでは華嚴経の記述内容としては章立てが説明されているのみである。

華嚴経は内容がいくつかの章にわかれている。そのなかでも重要なのが十地品だと考えられる。十地品とは、菩薩が如来へと向かって成長する十の段階が、金剛藏菩薩によって説明される箇所である。

十地品は独立した十地経という經典に基づいている。十地経はサンスクリット本のほかにいくつかの漢訳が残っている。華嚴以前に成立した十地経が、華嚴経の編纂時に十地品として編入された。この十地経は仏教の心理学といえる唯識思想と関連が深く、世界の一切をこころによって説明する十地経の唯心思想は、唯識思想に大きく影響を与えたとされる。唯識をまとめた「唯識三十頌」に代表される世親は、十地経の解説として「十地経論」を記した。また十地

経論をもとにして地論宗が成立し、地論宗の思想は地論宗の教学に影響を受けた華嚴宗の第2祖の智儼より、第3祖の法蔵を経て華嚴宗へと継承された。

そのため十地経は仏教においてこころを扱っている唯識、華嚴という仏教宗派の根底に流れている經典といえる。日本の仏教における南都六宗のうち東大寺を総本山とする華嚴宗、興福寺を本山とする法相宗の源流をたどっていくと十地経に至るのである。

これまで十地経は仏教学者によって文献学的な研究が行なわれてきた。文献学は伝統的解釈および各語訳の比較等を行い、經典の正確な記述内容を把握していく。体系的にまとめられたものとして伊藤（2013）の研究などがある。ほかに比較思想研究として十地経とロマ書の比較（笠井 1991）がある。しかし深層心理学の観点から、十地経を研究することはこれまでほとんど行われていない。

僅かに挙げられるのは華嚴思想を論じた本の解説において、河合が十地経に触れている箇所である。河合は十地を読み解く苦勞を述べたあと、十牛図の理解に基づいて十地の第七地と第八地のあいだで「十地の過程が二分されると考えた」（河合 1996）といった。十牛図の第七図「忘牛存人」と、第八図「人牛俱忘」のあいだの変化と、十地経との類似点を指摘している。十地経では第六地ですべてがこころから生じるという唯心を知ったあと、第七地と第八地ではこころの本質を知ったあとの変化について説明される。河合は十地品に書かれた人間の変容過程に注目したのである。ただし冒頭に挙げたように本来河合は治療者としての「全体との関係性のなかにある私」を考えるなかで華嚴に出会っている。にもかかわらず、十地経を読み解く際には治療者としての「私」の相互連関について述べていない。

そこで今回、十地経の冒頭部を深層心理学の観点から、登場者の相互連関について分析を試みる。十地経に登場する菩薩は衆生の悩みの本質であるこころについて説明をする。衆生の悩みを治療するためにこころを扱うという点において、菩薩集はこころの治療者たちともいえる。菩薩集のなかでも、リーダーでありこころの本質を説くという役割を担っている金剛蔵菩薩は重要である。のちにみるように金剛蔵菩薩の変容の在り方が菩薩集という集団に影響を与え、菩薩集の変容を促すのである。

十地品の序品（序章）は釈迦の下に集まった諸菩薩のうち、金剛蔵菩薩と解脱月菩薩が問答をして、諸菩薩の「私」の在り方を検討する箇所である。伊藤は序品を「十地の教説の含意する思想的にして本質的な意義ともいべきものが概要的に表示されていると期待しうるのであり、また実際のところ諸種の局面においてそうなのである」としつつも、「しかしながらこの部分の経文は、本経文中その意味表現および内容叙述の上に大乘經典特有の略称的なのに加えて神話的な傾向が殊に強く顕われており、したがって経文のみによる考察では極めて理解の困難なものである」（伊藤 2013）とした。序品は菩薩衆が十地の教示についての可否をめぐって問答する様子が物語調に描かれる。十地を説明するほかの章と比べて、序品は内容を理解するために象徴解釈が求められると考えられる。

そこで本論では分析心理学の Jung が神話や物語りの象徴解釈を行ったように、十地経の序品を深層心理学の観点から分析することを試みる。とくに序品については二人の菩薩である金剛蔵菩薩と解脱月菩薩のやり取りは、深層心理学的にも興味深い心的交流が展開しており、両者の間で生じた象徴的な現象および金剛蔵菩薩の変容について、深層心理学的に分析することに

意義があると筆者は考えている。

今回分析するにあたって十地經のテキストとして、筆者のような専門外の者にも接近しやすい十地經のサンスクリット原典からの翻訳である荒牧訳（荒牧 1974）をもとにし、適宜、漢訳、サンスクリット本を参照とした。

2. 序品のまとめ

まずは十地經の序品をまとめつつ、物語上の要点を挙げていく。

十地經は、世尊が他化自在天王の宮殿にいる世尊のもとに菩薩たちが集まっている場面から始まる。集まった菩薩たちは、一生補処の無上正等をさとりであろうとされる優れた菩薩たちであり、別々の世界からあつまっていた。あらゆるところに平等にいたる心をもって修行し、あらゆる衆生の世界のうちに分身を顕現させている。

そのなかでも金剛を内に蔵するという名の金剛蔵菩薩がリーダーである。金剛蔵菩薩は「かぎりない知の光明に輝く」三昧に入定する。すると途方もない数の如来が顔をあらわし、金剛蔵菩薩を嘉する。その如来の名前も「金剛蔵」という。この諸如来が金剛蔵菩薩に加護をくわえるのは盧遮那仏の加護をうけたため、また金剛蔵菩薩にゆたかな徳と深い知があるためだと如来はいう。金剛蔵菩薩に加護をくわえるのは、法の光明を説法によって輝かせるようにするためである。それはすなわち十の菩薩の位について説法するように努力してはじめてその妙を体得することであるという。

諸仏は經を説くようにと告げて加護を加え、不思議な力として説法をする力を金剛蔵菩薩に与える。諸仏が金剛蔵菩薩の頭頂をなでると、金剛蔵菩薩は三昧から出定して、そこに集まっていた諸菩薩に語りかける。
(荒牧 1974 pp.7-15 筆者要約)

ここで強調されているのは金剛蔵菩薩に授けられた説法力である。三昧という瞑想の中で金剛蔵菩薩は、「説法をするのにふさわしい素質がそなわっている」、「説法することでさらに法の光妙を輝かせるようになる」と予言を受ける。さらに金剛蔵菩薩は如来から「説法をするように」と伝えられる。この説法をいかに実現させるかがこの序品において重要なテーマとなる。

諸仏が金剛蔵菩薩の頭頂を撫でて加持を加えると金剛蔵菩薩は三昧から出定し、集まっていた菩薩衆に話しかける。

金剛蔵菩薩は菩薩の誓願は深く定まっているという。空間性の広がるかぎりをきわめつくし、あらゆる衆生をあますところなく見守っているという。そして真理として菩薩の行う十の菩薩の位「十地」について話し始める。それは、1 歓喜地、2 離垢地、3 明地、4 焰地、5 難勝地、6 現前地、7 遠行地、8 不動地、9 善慧地、10 法雲地であり、それぞれの地の名を羅列している。これは過去、未来、現在の諸仏が説き、しかもあらゆる仏国土でも説かれているという。この教えこそ法の妙であり、菩薩道をあますところなく清浄にするという。しかしこの十地の名をあげたまま、それ以上は説明せずに金剛蔵菩薩は黙ってしまう。

そこにいた菩薩たちは菩薩の位、十地について名前を聞いたものの解釈を得ることはなか

った。なぜ金剛蔵菩薩はなにもいわず沈黙し、説明をしなかったのかと諸菩薩は思惟しはじめる。
(荒牧 1974 pp.15-17 筆者要約)

金剛蔵菩薩は目覚めたあと、三昧のなかで如来より「説法をするように」と伝えられているにも関わらず沈黙する。そこにワキとしての解脱月菩薩が物語の舞台に登場して問答が始まる。

菩薩たちのなかから、解脱月菩薩があらわれる。解脱月菩薩は諸仏が思惟していることを察知し、詩頌によって金剛蔵菩薩に問いかける。「なぜ菩薩の位をいうだけで説明しないのか、ここにいる諸菩薩は徳も知もそなわり浄らかな信心もある」といい、諸菩薩の思いを「まじりもののない花の蜜を集めようとする蜜蜂の思い」にたとえる。

金剛蔵菩薩は解脱月菩薩の訴えをそのとおりだと認めつつ、なぜ黙していたのかを説明する。それは「知あるひとびとがさとして諸眞実は思惟するのがむずかしく、ありきたりの思惟ではわからない。ふつうのひとびとは教えを聴いてもわけがわからなくなる。堅固な心を持つこと、諸仏の知が最高であると信じること、まよいの心のはたらく地には自我がなく実体がないことをさとして始めて、教えを聞くことができる。そのため衆生のうちでこのような知について理解するものがあるはずではないのでは。そう思うので説けない」という。

解脱月菩薩は、ここに来ている諸菩薩の浄らかさを説明し、諸菩薩は金剛蔵菩薩がいった菩薩の地についての知をさとり地にあると返事する。

金剛蔵菩薩は、「ここに来ているひとびとの浄らかさは認めているが、ほかのひとびとがこの不思議な眞理を聞いてしまうかもしれない。聞くと不信や疑念を抱くことになり、苦悩するばかりとなる。そういう慈悲の心がおこっているので、沈黙したまま満足している」という。

解脱月菩薩はさらに、説法をはじめてくださいと嘆願する。「諸菩薩は不可思議な深く信じることができる。それは菩薩の地が説法されていると諸仏の思いやりが集まってきて、教えを守ろうとする願求がわいてくる。この知の地こそがもっともはじめの菩薩行でもあり、もっともおわりの諸仏の徳の体得でもある」という。文字を教えることにたとえ、仏の徳のはじめにあるのは菩薩の地であり、それにしたがって菩薩行が円満に成就していく。おわりにあるのも菩薩の地であり、それによって自由自在者の地をさとり。そのため説法をしてくださいという。

そして、あつまっていた諸菩薩が声をそろえて詩頌にして金剛蔵菩薩に嘆願する。「菩薩の地について説法してください、ここに集まっているひとびとはあなたの説法を願っている、渴いているときには水を、飢えているときは食物を、病苦にあれば薬を、蜜蜂であれば花の蜜を願うようにと。不思議な知力があって無礙自在なるめでたい如来の存在も、ついにはあきらかにして、完全に」という。
(荒牧 1974 pp.17-25 筆者要約)

金剛蔵菩薩は沈黙する理由を語る。衆生がもしこの教えを聴くと、理解するどころか苦悩するという。解脱月菩薩は「菩薩の地が菩薩行の始めと終わりであり、ここに集まっている菩薩

三輪：十地經にみる菩薩の変容過程

は聴くことによって迷うことはない」という。ここで衆生と菩薩集の立場が対比される。

ただし菩薩とは、十地經の第三地「明地」の記述によると「菩薩において、業をなし果をうける主体としてのところは、衆生のためにたくみな方便によって存在するにすぎない」のであり、菩薩は衆生によって存在するにすぎない。

金剛藏菩薩は、衆生は正しい教えを理解しないどころか教えを聴くことで苦悩するという。また解脱月菩薩らも金剛藏菩薩の考えを引き継ぎつつ、衆生と比べて自分たちは修行を重ねており、正しく教えを理解するから説法をしてほしいと主張する。「衆生は誤解して悩む」という菩薩らの見立てが説法を止めている。ただし金剛藏菩薩は沈黙しながらも「満足している」という。解脱月菩薩らが嘆願しても金剛藏菩薩は沈黙を続ける。

そのとき釈迦牟尼仏の眉間にある白毫より光明が発せられた。十方のあらゆる方位にわたって、あらゆる種類の世界を照らしだし、苦悩に満ちた存在を解消し、あらゆる種類の世界のあらゆる如来の説法会において、諸仏の自由自在な加護を受けて説法する諸菩薩を照明して、不思議な諸物のはたらきをあらわすなどを示し、空中の上方で「光明の雲の織りなす講堂」となる。それに応じるように諸仏の眉間の白毫からも光明が発せられ、釈迦の光明と同じように世界を照らしだし、ここでは説法会および金剛藏菩薩の身体を照明し、同じく講堂となる。

その講堂から音声が轟く。「他に同類なくして、彼らのあいだでは平等で、空間的にも等しい。如来たちの不思議な力をうけて、菩薩の知の地を説けばよい、この経が聞こえているとすれば、すでに如来が加護を加えている。大海の水の底でも、劫火のもえさかるなかでも疑惑の心さえおこしていなければこの経を聞くことができる。思案していたり懷疑にふけているひとびとの耳にはとどかない。ひとつひとつ順をおってどのような菩薩行をなし、どのようなことをさとるかも説法するがよい」とその声はいう。

金剛藏菩薩はひとびとの信心を淨らかにしようと詩頌でこたえる。「そのままさとるのは難しい。知のあるひとの知によってさとられるもの。それは本性において空である。輪廻も涅槃も平等であるままに涅槃をさとっている、過去・未来・現在の三世にかかわりがなく、空間的にもひとしい。菩薩の地においては思惟も心の動きもなくなり、さとりの知によってのみ実現される。まよいの存在、認識する存在、知覚する存在において実現されることはない。

鳥が空を飛んでいくときのあとかたを言い表すことも指し示すこともできないように、いかなる菩薩の地も言葉で言うことはできない。ましてやそれを聴聞するとは」

終わりには金剛藏菩薩は経を説いてみようといい、諸眞実は言葉でいうことはできない、菩薩の地において知を体得していくのには、かくかくかようにしてであると説きつくすことはできないが、要約して語ることとする、という。

「私は仏の不思議な力を受けて説くこととする、法を言うにふさわしい妙音で、比喻を用い、論理に従って、適合した軸によって述べるという。私のうちには如来の力が光明となって満ちあふれており、その力を受けてこそ説くことができる」とする。そして十地の説明が始まる。

(荒牧 1974 pp.25-31 筆者要約)

金剛蔵菩薩は菩薩の地を言葉にして説明するのは難しいという。これが沈黙の真の理由のようである。衆生の理解力だけが沈黙の理由ではなく、金剛蔵菩薩の説法力をもっても十地を説法することが難しいためにためらっていたと金剛蔵菩薩は語る。

金剛蔵菩薩は瞑想のなかで「十の菩薩の位について説法するように努力してはじめてその妙を体得する」と行うべき努力を宣告された。つまり「言葉にするのは難しい真実」を「説法するように努力する」ことが金剛蔵菩薩の修行といえる。

序品の最後で金剛蔵菩薩は講堂の声から助言を受けた。如来は語る代わりに光を放ち、金剛蔵菩薩の「内側の光」を引き出した。如来の光は菩薩と衆生を平等に照らし、それぞれに変容をもたらす。序品ではどのような変容が起きていたのかを次章から分析していく。

3. 菩薩グループの構造分析

心理療法において集団の精神力動的な交流を分析することは、グループの基本構造を把握することから始まる。グループの構造とは、どのような場所と目的で、どのようなメンバーが集まっているグループかということである。そこで菩薩グループの構造把握から分析を始める。

まず序品は他化自在天にいる釈迦如来の前に、菩薩が集まっている場面から始まる。仏教の世界観では、他化自在天とは衆生の住む欲界の最上層に位置し、欲望を離れたものが住む色界という世界の下にある。他化自在天は色界と衆生の世界を繋ぐ境界領域である。そこに釈迦如来がいるということは、釈迦如来は如来と菩薩、衆生を繋ぐという象徴的な役割を担っていると考えられる。そして釈迦如来がここにいるのは悟りを悟って間もないときとされ、悟りの内容はまだ語られていない。菩薩たちが釈迦如来の言葉を聞こうと待ち望んでいる前で、釈迦如来が沈黙している。それが十地経の始まりの状況である。

釈迦如来の悟りに接するために金剛蔵菩薩は、自ら三昧に入るという方法をとる。これは如来を目の前にしたときに、自らのこころの動きに注意を向けて、深層から連想を汲みあげようとする試みといえる。特定の対象を面前にして自分の内界と深く向き合っけ気付きを得ようとする方法は、仏教の観相や禅の座禅、浄土真宗の身調べなどにもみられる。治療者との対話を通して無意識に触れていく深層心理学の心理療法にも通じる方法である。

金剛蔵菩薩は三昧のなかで十地についての知を得る。そして十地の詳細を菩薩集に話そうとするそぶりをみせつつも沈黙する。沈黙した金剛蔵菩薩に解脱月菩薩らが嘆願を始める。

これを集団力動的観点からみると、集団のリーダーへの依存関係が起こっている可能性が疑われる。集団においてメンバーとリーダーの間で依存関係が起こっていると、ほかのメンバーは関心をリーダーに集中させ、各人が自分の問題を考えることを回避する(Bion 1961)。あらゆる判断をリーダーに委ねて、残りのメンバーは自ら考えることを辞め、集団が扱うべき課題が抑圧される。

この集団は悟りを希求する菩薩が、悟りを得た釈迦如来に教えを請うという構造がある。如来は菩薩にとっての理想像という上下関係がある。釈迦如来が沈黙しているため、菩薩は教えを知ることができない。そこで菩薩集のリーダーである金剛蔵菩薩が三昧に入り、十地の知恵を得ることで如来の教えを伝えようとする。

金剛蔵菩薩は十地を知るが、解脱月菩薩らは知らない。悟りの知を持つ如来と知を持たない

菩薩という関係性のテーマは、十地の知を持つ金剛蔵菩薩と持たない解脱月菩薩らのテーマとして、沈黙という行為を中心に置きつつ再演される。金剛蔵菩薩と解脱月菩薩のあいだに繰り広げられた沈黙をめぐるやりとりとは、如来の沈黙を金剛蔵菩薩が沈黙することで再演したといえる。

では金剛蔵菩薩は瞑想のなかで「十地を説くように」といわれていたにも関わらず、沈黙を続けたのはなぜだろうか。

4. 金剛蔵菩薩の沈黙

沈黙について考えるために金剛蔵菩薩や解脱月菩薩はどのような菩薩なのかと考察する。

それぞれの菩薩の名前を象徴的に解釈すると、金剛蔵とは“金剛”つまりダイヤモンドを蔵するという意味である。ダイヤモンドは堅固で壊れず、光を受けて輝く宝石である。光を放つ毘盧遮那仏、つまり象徴的には毘盧遮那仏は太陽といえる。太陽の光を受けて輝きを四方に放ち、しかも破壊されない堅固な菩薩という意味を持つのが金剛蔵菩薩であろう。

解脱月菩薩は月との関連が想起される。月は夜空を照らす光であり、夜という影の世界に光をもたらすという象徴的意味が考えられる。金剛蔵菩薩は光を集めて放ち、解脱月菩薩は夜空を照らす。昼の太陽と夜の月という対比がこの関係に布置されている。

太陽と月のような対立物の結合は「ア・プリオリなイメージであって、人間の精神発達のため重要な位置を占めてきた」(Jung 1946 p.12)。ここでの金剛蔵菩薩と解脱月菩薩の対立によって、菩薩集が変容する可能性が布置されているといえる。

人間の個性化過程において変容の契機は、個人にとって否定的な側面、つまり影の部分からもたらされることが多い。象徴的には光によって照らしだされていない部分、深層心理学的には無意識に抑圧されているコンプレックスである。それは集団でも同様であり、集団のコンプレックスが変容の契機をもたらす。

では菩薩集の集団が持つコンプレックス、つまり抑圧されているものは何か。考察するために十地経で否定的に言及され、また脇に置かれつつも沈黙という事態に大きく影響を与えた影を担う存在を探してみる。そこで見いだされるのが説法を誤解するといわれ、まだ菩薩の段階にも至っていないとされる衆生たちである。

金剛蔵菩薩は「誤解するもの」として衆生をあげる。解脱月菩薩も衆生について直接は語らず「ここにいるものたちは、清らかで」という。つまり「ここにはいないものたちは、清らかでなく、誤解する」ということを暗にほめかし、菩薩よりも能力が低い存在として衆生を扱っている。

金剛蔵菩薩は「十の菩薩の位について説法するように努力してはじめてその妙を体得する」のであり、修行の中心は「衆生への説法」だった。修行の進展を避けるかのように金剛蔵菩薩は沈黙を続ける。

この事態を理解するために、自分自身を神格化するコンプレックスについて Jung 派の Guggenbühl-Craig が述べていることをみってみる。「この関係で、支配する側に回った主体は、自分の方が重要なのだという感じを強くもつようになり、対象にまわった側はその場の状況には責任を持たなくてもよいようにされてしまうのである。これはある種の力の現われである。も

う一つの別の力というのは「自分自身を神格化する」ということである。神、あるいは神々のみが人間を支配する力を有しているものなのだが、「神コンプレックス」にとらわれている人はあたかも自分が神であるかのように、他の人々をも支配しようとするのである。この種の力がヌミノースなのであり、支配される側にとってもする側にとっても、極めて危険なものである」(Guggenbühl-Craig 1978 pp.111-112) という。

金剛蔵菩薩は事態を支配する側にいる。そして菩薩集のなかでは、金剛蔵菩薩のみが十地を知っているという力関係がある。残りの菩薩集や衆生が十地を知るかどうかは、金剛蔵菩薩の説法にかかっているかのようである。しかし、そこにいる菩薩集には金剛蔵菩薩の説法がなくとも、自ら修行を重ねて十地の知を得るという選択肢もあるだろう。しかし菩薩集は自らもさらなる修行を重ねて、金剛蔵菩薩と同じ瞑想に入って如来の知を得るという方向性について探る素振りもみせない。あたかも十地を得るかどうかは、金剛蔵菩薩の説法のみにかかっているかのように訴え、菩薩集が主体的に修行するという考えは示さない。一方で金剛蔵菩薩は十地経を説法しないことによって、菩薩集が自ら修行を重ねて十地を得るという可能性を見えなくさせているともいえる。このような膠着した事態を支配している集団力動について金剛蔵菩薩は気づいていないかのようである。

金剛蔵菩薩も菩薩集も「自分たちも未だ修行を続けなければならない存在」であることに言及せず、衆生にコンプレックスを投影し、自らは神コンプレックスに捉われているかのようである。衆生に説法することを避け、衆生と関わることから遠ざかっている。

菩薩らは、自分たちの修行が困難であるために、修行の継続をためらっているかのようである。それを裏付けるものとして、如来の光によって示唆を得たあとの金剛蔵菩薩の語りがある。「いかなる言語の言語の妙をつくしても、言葉でいうことはまったくむずかしい」「いかなる菩薩の地も、言葉で言うことはできない」「菩薩の地においてさとの諸真実は、なかなかあきらかにしがたい」「それを説きつくすことは、幾劫かかろうともできない」「このような言葉によっても、説くことはまことになしがたい」と説法の難しさを繰り返し主張する。つまり衆生が説法の内容を誤解するだけではなく、菩薩であっても真実を説明することが困難であるという自覚が沈黙を生んだと考えられる。これは自らの説法によって衆生に誤解を生じさせてしまうのではないかという、菩薩の心理的な不安に基づく葛藤ともいえるだろう。また金剛蔵菩薩にとっては、説法することで成長ができるという現状を避けようとする動きでもある。コンプレックスとの対決を避けようとするほど、コンプレックスの影響に圧倒されて身動きがとれなくなるという現象は、心理療法ではしばしばみられる。

金剛蔵菩薩は三昧のなかで、如来より十地を説くことの重要性を繰り返し伝えられていた。それは「説くことへの不安」を抱く金剛蔵菩薩が、説法をすることによって不安を乗り越えたときに変容が起きることを暗示した如来の予言とも考えられる。心理療法でも不安を生み出すコンプレックスとの対決が達成されたときに変容が起きる。

金剛蔵菩薩は釈迦如来から放たれた光をきっかけにして十地を語ることを決心した。光は菩薩集のいる世界だけでなく、衆生や地獄・餓鬼・畜生の世界にまで届いた。光は金剛蔵菩薩が進むべき方向性を示すように、金剛蔵菩薩や菩薩集の影となっていた衆生を照らした。

釈迦如来から発せられた光によって講堂が現れる。講堂からの声が、衆生にとってたとえ十

地の内容について理解するのが難しいとしても「聴くだけで縁がある」と助言する。講堂の声は、衆生の理解力ではなく、衆生が説法を聴くという事実そのものに焦点を当てている。衆生の体験的な事実を優先するという示唆であろう。

金剛蔵菩薩たちは衆生への説法を避けようとしていた。金剛蔵菩薩は自らの不安をみることなく、自らは深い理解を持っているので衆生と離れていても満足しているという態度をとっていた。しかし十地を真に理解できずに悩んでいるのは衆生ではなく、金剛蔵菩薩ではないだろうか。十地の名称や内容を理解はしつつも、金剛蔵菩薩は十地をまだ体得していない。十地を体得していないために如来になれないという自らの迷いを衆生の迷いとしてみていたのではないのか。これは深層心理学からみると衆生に対する金剛蔵菩薩の逆転移だと考えられる。Jung の観点では「転移／逆転移は、おそらく不可避免的で、ときには有用でさえある自然的出来事だった」(Hopcke 1989)。この逆転移は金剛蔵菩薩の変容する可能性を示唆しているのである。

沈黙に変容をもたらしたのは、金剛蔵菩薩と解脱月菩薩の二項対立を越えた、第三の要因として現れた如来の光であった。対立するものが行き詰まったとき第三のものが象徴的に現れ、創造的な働きをなす現象は分析心理学でも記述されてきた (A.Samuels ほか 1986)。

5. 如来の沈黙

沈黙とは象徴的には死を表す。Jung は死に積極的な意味をみだし、ここは象徴的な死と再生のプロセスにおいて成長していくとした。心理療法において死や再生は繰り返し現れるテーマであり、象徴的な死がクライアントに劇的な変容をもたらすことがある。また象徴的な死として心理療法のなかに沈黙が訪れることもある。

Jung 派の分析家である河合隼雄は、心理療法において沈黙するセラピストであった。河合は沈黙のなかで、開かれた態度と同時にコンステレーション、布置を読もうとしていたとされる (皆藤 2014)。河合は自然モデル (河合 1992) において、治療のプロセスが自然に働いているときには、外的には治療者は何もしていないようにみえるが、極めて大量の心的エネルギーを必要とすると説明した。

自然モデルの例として、Jung 派で重視しているものに雨降らし男の話がある。

幾月も干ばつが続いている土地があった。雨乞いを何度も行ったが効果は表れなかった。そこに雨降らしの老人が連れられてきた。老人は小屋を建ててくださいといい、老人はそこに3日間籠った。すると4日目には雲が集まり、猛吹雪となった。村の人がどのように降らせたのかと老人に尋ねると、老人は私には関係ない、けれども、ここはタオの状態になく秩序が乱れており、そのなかにいる私も調子を崩した。そのためタオに戻るまで私は3日間待っていた。そして自然と雨が来た (Jung 1955 pp.419-420 脚註部 筆者による要約)

雨降らし男は雨乞いの儀式を一切しなかった。小屋のなかにいるだけで外的には何もしていないようであった。しかし老人は調子を崩した。それは、その土地がタオの状態になく、そこに来た老人も同じくタオが乱れたためという。そして老人のタオの状態が戻ったとき、自然と雨が降り出した。

治療者はクライアントとの相互連関において、「無意識内容に感染することによって、つまり病気がその治療者に転移することによって、治療のうえで少なからず重要な可能性が引き出される」(C.G.Jung 1946 p.19)。つまり雨降らし男は、干ばつに見舞われている土地の集会的な無意識に感染することによって調子を崩した。それによりその土地の可能性が引き出され、雨がもたらされた。

沈黙とは象徴的には死であり、外的には何もしていない態度である。しかし内的な無意識においては、死と生が連動しつつ創造的な力を発揮する。

沈黙している如来は死であると同時に再生を象徴する存在である。十地経における釈迦如来は自身も苦行を終え菩提樹の下で悟るという、象徴的な死と再生を実現したばかりであった。沈黙している如来から発せられた光は遍く世界を照らした。それは遍く世界へと関心を向け、無数の存在の影を照らしつつ、布置もしくは縁の作用に任せている、釈迦の再生した姿である。

如来の光によって現れた講堂は、金剛蔵菩薩と解脱月菩薩らが行き詰まったときに現れた。それは菩薩らの試みにとって象徴的な死であった。心理療法でも対立していたものが結合したときに、それを超える「第三のもの」が象徴的な形をもって現れる。衆生という自らの影と向き合わなければならないという点で、金剛蔵菩薩と解脱月菩薩らが一致していた。それが死と再生の契機となり、第三のものである講堂を現出させたと考えられる。

講堂からの光が金剛蔵菩薩に届いたとき、金剛蔵菩薩の内部から光が発せられた。それは十地を語って成長を遂げるという金剛蔵菩薩の可能性を引き出す光であった。金剛蔵菩薩も説法を通して変容をしなければならなかった。

如来から放たれた光は、菩薩や衆生を内部から輝かせた。その輝きから放たれた光は彼方へと放射され、あらゆる存在を輝かせ、さらなる光の連関を生む。その無数の内的な光の連関を接続していくことが華嚴世界なのである。

6. 治療者としての態度

如来は深層心理学的には自己実現が完成した姿といえ、そこには光や影の対立はないと想定される。しかし菩薩や衆生は如来のように自他の影に光を照らし尽くすことはまだできない。自分の悩みを他人に置き換えて、自分の影を他者に映し出し、他人に問題があるかのように思い込む。そのため菩薩も衆生に自らの影を照らし出すことによって行き詰まりを経験する。

もし金剛蔵菩薩が沈黙を続ければ、十地の知恵は菩薩集にも衆生にもたらされなかったかもしれない。この沈黙は釈迦如来の梵天勧請を連想する。仏陀が悟りを得たあと沈黙するのを梵天が説得したように、金剛蔵菩薩が沈黙を続けるのを解脱月菩薩が説得した。沈黙という死が続けば十地の教えだけでなく、菩薩らの変容も沈黙とともに失われた可能性がある。

十地経の序品では金剛蔵菩薩らが自らの影と向き合う過程が描かれている。金剛蔵菩薩は解脱月菩薩らに自らの迷いを告白することで自らの影を克服し始める。

心理療法においても、治療者はクライアントとの相互連関を通じて自らの悩みを生きる。クライアントから発せられた光を受け、治療者自身も自らの影を知る。そして治療者も光を返していくという相互交流が生じたとき、クライアントや周囲の世界を輝かせる。

「もちろん分析家の中には、元型を分裂させていない、真の意味での「傷ついた治療者」もい

る。このような治療は、いわば持続的に患者によって分析を受けているのであり、透視され続けているのである。彼は再三再四、患者の問題がどのように分析家自身の問題を布置し、あるいはまた彼の問題がどのように患者の問題を布置するのを見るのであり、それ故、患者に対してだけではなく、自分自身に対しても開かれた態度で仕事にたずさわる。彼自身もまた、患者であり続けるのである」(Guggenbühl-Craig 1978 p.170)。影を照らす光の連関を繰り返すやり方が、治療者としての「私」なのである。

菩薩は衆生へ想いを寄せ続け、衆生のこころに向かい合って説法をする。菩薩の説法が真に衆生のこころに届いたとき、衆生のこころが光り輝き、その輝きが世界を照らす。衆生にとっては「私たちに説いて下さる菩薩」ではあるが、菩薩にとっては「衆生の救済」そのものが修行である。ともに修行するという点において両者は平等である。心理療法でも治療者がクライエントとの間に布置された転移・逆転移というこころの相互連関を通じて、変容という自己実現の光を輝かせる。クライエントと治療者が出会う相互連関という布置のなかに、治療者の「私」は存在するのだ。

引用文献

- 荒牧典俊 1974/2010 大乘仏典 8 十地経 中央公論社
- W.R.Bion 1961 *Experiences in Groups*, Tavistock Publications. 対馬忠 訳 グループ・アプローチ
サイマル出版界 1973
- A.Guggenbühl-Craig 1978 *Macht Als Gefahr Beim Helfer* “Pshchologische Praxis, Band 45”
S.Karger AG, Basel 樋口和彦 安溪真一 訳 「心理療法の光と影 援助専門家の〈力〉」
1981 創元社
- Hopcke Robert H 1989 *A Guided tour of the collected works of C.G Jung*, Shambhala Publications,
USA, 入江良平 訳 「ユング心理学への招待」1992 pp.96-97
- 伊藤瑞叡 2013 「増補 華嚴菩薩道の基礎的研究 ——十地経における菩薩道とその歴史的
発展」 国書刊行会 pp.101-102
- 井筒俊彦 1989 コスモスとアンチコスモス 岩波書店
- Jung C.G 1945 *Die Psychologie der Übertragung* 林道義 磯上恵子 共訳 「転移の心理学」
1994 みすず書房
- Jung.C.G 1955 *Mysterium Coniunctionis*, The Collected Works of C.G.Jung , second edition
vol,14,Princeton University press pp.419-420
- 笠井貞 1991 『ロマ書』と『十地経』の信について 比較思想的研究比較思想研究 18, 85-93
- 皆藤章 2014 「河合隼雄の臨床 コンステレーションを中心に」 ユング心理学会/編 ユン
グ心理学研究 第6巻 河合隼雄の事例を読む p.70
- 河合隼雄 1982 「中空構造日本の深層」 中央公論社
- 河合隼雄 1987 「明恵夢を生きる」 京都松柏社
- 河合隼雄 1992 心理療法序説 岩波書店
- 河合隼雄 1995 「ユング心理学と仏教」 岩波書店
- 河合隼雄 1996 文庫版 あとがき, 鎌田茂雄 上山春平 1969/1996 仏教の思想 6 無限の

世界観〈華嚴〉 角川書店 p.336

A.Samuels B.Shorter F.Plaut 1986 *A Critical Dictionary of Jungian Analysis*, Routledge & Kegan Paul, 山中康裕 監修 濱野清志 垂谷茂弘 訳 1993 ユング心理学辞典 創元社 pp.107-108

J.M.Spiegelman 目幸黙僊 1985 *Buddhism and Jungian Psychology*, Falcon Press 森文彦 訳 1990 仏教とユング心理学 春秋社

山中康裕 1987 禅画牧牛図と精神療法課程 精神療法における仏教的救い 山王出版

山中康裕 2010 深層心理学から見た華嚴経の宇宙 ユング心理学研究 第2巻 ユングと曼荼羅 創元社

(臨床実践指導学講座 博士後期課程3回生)

(受稿 2016 年 9 月 7 日、改稿 2016 年 12 月 1 日、受理 2016 年 12 月 26 日)

十地経にみる菩薩の変容過程

—十地経序品の深層心理学的考察—

三輪 幸二郎

本論では仏教經典の十地経の序品に記されている、金剛藏菩薩の沈黙について深層心理学の観点から分析した。十地経の序品では金剛藏菩薩と解脱月菩薩の二人の菩薩が十地という菩薩の十の成長段階を説明することの可否をめぐって話し合う。金剛藏菩薩は十地を誤解する衆生がいるといい詳細を語らず沈黙する。解脱月菩薩らは金剛藏菩薩を説得するが事態は変わらない。そのとき如来の光が照らし出され、それを機に金剛藏菩薩は十地を語り始める。深層心理学からみると、沈黙という事態が生じたのは菩薩らの転移が影響していると考えられる。本論では菩薩らの対話や菩薩が集まっているグループ構造、転移の分析によって金剛藏菩薩の沈黙について象徴的な意味を分析し、菩薩は転移やコンプレックスがあるために如来に成れていないことを明らかにした。本論は十地経の深層心理学的な理解と、クライアントと治療者の在り方について有益な観点をもたらすだろう。

Growing Process of Bodhisattava in the Ten Stages Sutra: Analyzing the Introductory Chapter from the Perspective of Depth Psychology

MIWA Kojiro

This report analyzes the introductory chapter of Ten Stages Sutra, which describes the silence of Bodhisattava Kongozo, from the perspective of depth psychology. In this chapter, Kongozo discussed the propriety to explain to sentient beings about the ten growth stages of bodhisattava with Bodhisattava Gedatugetu. Kongozo became silent without explaining details as he felt that people will misunderstand the stages. Gedatugetu tried to persuade him; however, Kongozo did not explain the stages. Thereafter, Kongozo attained enlightenment and began to explain the details. From the perspective of depth psychology, this silence of Kongozo occurred due to transference of Kongozo, Gedatugetu, and sentient beings. Analyzing the symbolic meaning of silence of Kongozo, bodhisattavas' dialogue, and group structure of bodhisattavas, it is clear that bodhisattavas cannot avoid transference and they cannot become Tathagata. This report is beneficial for understanding the Ten Stage Sutras from the perspective of depth psychology as well as for analyzing patients and therapist attendance.

キーワード： 十地経序品，深層心理学，転移

Keywords: introductory chapter of “Ten stages sutra, depth psychology, transference

